らする爲に紙の厚を可とする也、常の小籠桶は半紙または反古にても可也、大籠桶の障子の骨は、太く十文字にして俗にいはゆる、蒲鉾形に中を高くす、そは唯形容の美なるに取るのみにあらず、たてはづしに利あれば也、鶯を愛する事甚しきにいたりては、この障子を飾るに、骨は唐木を用ひ、或は黒漆に塗て、金粉をいかけ、腰板には金銀を蒔繪にして莊嚴を盡し、宮の桐も島桐の糸正目の細密なるを擇びて製するにいたれり、

〔宗五大草紙下〕色々之事

一鶯を貴人の御目にかけ候事、籠桶のさまの方を御前へむけ、左の手にて蓋をあけて、籠桶の上にあをのけて、御前の方へ丸わをなしをくべし、扨そとこおほひを取べし、こざしはこばんのいためにさし候、又奏者に渡候時も、今のごとく取出候て見せて、さて丸輪の方をさまの方へなして、籠桶に入て緒をゆひて渡すべし、

〔三十二番職人歌合〕三番　左持

羽かせだに花のためにはあたこ鳥おはら巣だちにいかゞあはせん　うぐひすかひ

左、羽風だに花のためにはあたこ鳥といへる、やさしくきこゆるに、をはらすだちにいかゞあはせんと侍るこそ、いかなるゆへとも覺侍らね、おはらは花の名所なれば、かくいへるか、をしほ山よめるも、せがひの玄水よめるも、おほはらとこそ申ならはしたれ、狂歌なれば、わざとかくあるもさる事ながら、所の名などは、いくたびも歌によむやうにぞありたく侍る、

十九番　左　鶯かひ

するゑあげてよきうぐひすとまむすればやがてとびなきするもおそろし

〔春鳥談〕鶯聲品定會の話

毎春三都に於て、鶯ノ聲の品を定むる會あり、江戸は正月下旬、二月中旬兩度、牛島に集會して、品定

鶯會